

師生四代

書象会作品招待展(武漢)

— 張裕釗書法文化博物館完成祝賀会 —

上條信山先生が、師である宮島詠士先生と張廉卿先生のあついで師弟の情誼に心打たれ、その美しい師生愛を中国の河北省保定市(蓮池書院所在地)と湖北省鄂州市(張廉卿故里)の両市に師生顕彰記念碑を建てられています。このたび鄂州市の張裕釗書法文化博物館が新しく開館するということで、師生四代ともいえる書象会書法作品(24点)の招待展覧が開催されました。

〈書象会代表団行程表〉 3泊4日

月日	移動	行動日程	宿泊
5月28日 (火)	成田発 武漢着	<ul style="list-style-type: none"> 17時、成田空港第1ターミナル集合。 夜、武漢に到着しホテルへ。 	武漢
5月29日 (水)	鄂州	<ul style="list-style-type: none"> 張廉卿文化園を見学。 書象会作品招待展、張廉卿流派回帰展を参観。 張廉卿公墓、記念碑、記念館、鄂州博物館を見学。 	武漢
5月30日 (木)	武漢	<ul style="list-style-type: none"> 湖北省博物館を見学。 黄鹤楼長江を遠望。 夜は張廉卿子孫のご家族と夕食会。 	武漢
5月31日 (金)	武漢発 成田着	<ul style="list-style-type: none"> 朝食後、武漢空港へ。 武漢発成田行全日空直行便で帰国の途につく。 	

張廉卿の故里を訪ねて

魚住 卿山

湖北省鄂州市くわくしゅうという聞き慣れない方が多いことかと思いますが、鄂州は武漢市に臨し、戦国時代に楚そに属し、三国時代になると呉の首府であったことのある湖北省の都市でした。東晋には若き日の王羲之がこの地で庾亮の参军(部隊長)を務めました。現在も湖北省の車のナンバーは、頭に「鄂」字がつけます。「鄂」は湖北の代名詞なのです。のち、鄂州は別に武昌ぶしやうとも呼ばれるようになりました。書象会書法の祖である張廉卿(諱は裕釗)は、この鄂州市の梁子湖畔、竜塘村りゅうたうそんを出生の地とし、もっぱら武昌先生と敬称されていました。これは、清朝末期の当時、「武昌」といえば張廉卿、「張廉卿」といえば武昌」との理解が、世にいか浸透していたかをものがたるものです。鄂州市には、小高い丘の斜面を利した景勝地である西山に張裕釗墓(中国では諱を使用)、それを麓から飾る張裕釗陵園、また前掲の竜塘村に張裕釗文化園があります。張裕釗墓は、上條信山先生が張裕釗の葬られる張家墩が文化大革命の際に破壊されたことを傷んで再興し、「張裕釗先生之墓」の題字を自ら揮毫されたものであり、陵園においても広い庭園に桜を植樹されました。しかも、陵園をめぐる回廊の壁面には、書象会より選抜された五十名の全紙作品がずらりと石刻となつて陳列されているのです。



田中節山先生揮毫による張裕釗陵園入口



張廉卿公墓の前で

一方の文化園は、村民から寄せられた張募金により、二〇一二年に完成された張廉卿書法の殿堂です。張裕釗の作品(すべて原寸大の複製による)のほか、歴史資料、文献

資料が三層造りの古風な建築の中に、所狭しと陳列されています。

本年度五月二十九日、書象会は内藤望山先生を団長とし、田中節山先生、市澤静山先生ほか書象会会員約二十名に、上條先生の御長女の唐澤かづ子様、次男の上條信之様が加わり、二十年ぶりに鄂州市を公式訪問しました。鄂州市では張裕釗文化園前広場で、人民政府主催により盛大な歓迎式典が催され、それにあたって書象会から上條先生の玉作の他、幹部作品二十点、また拓本資料、書籍資料などが寄贈されました。

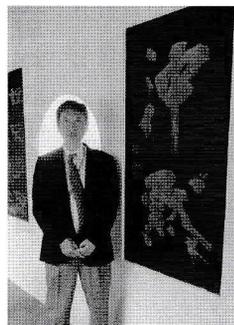
続いて西山の張裕釗墓と陵園を参拝。手入れがいき届き、樹々が成長して生い茂る中、一行は二十年の歳月の経過に感慨を深めました。翌三十日には、武漢市内の湖北省博物館別室において、館蔵の張裕釗遺墨の数々を、一時間半にわたって特別拝観をさせていただきました。



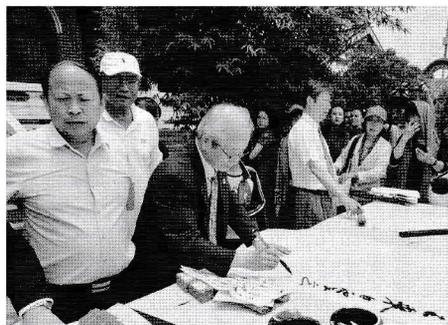
田中節山先生の席上揮毫



団長、内藤望山先生の挨拶



揮毫した碑の前で、山口啓山先生



市澤静山先生の席上揮毫



張廉卿子孫のご家族と夕食会

書象会の書の源流に感激

師上條信山先生の書のルーツを巡る旅は田中先生、市澤先生、内藤先生、魚住先生の偉大な功績あつての催しであると痛感した四日間でありました。張廉卿陵園では、多くの中国メディアの中で贈呈式が執り行われ、先生方の貴重な揮毫を間近で拝見できました。博物館の特別室で拝観した張廉卿先生肉筆は、我が会に脈々と続く書の源流そのものでした。先生方と共に拝観させていただけるとは、何たる贅沢なことでしょう。

張家の歓待の宴は、上條家、先生方への深い愛に満ち、両家、先生方との長い長い歴史を感じさせるものでした。参加させていただきありがとうございます。再訪の機会を楽しみにしております。(鈴木花仙記)

心に残る素晴らしい旅

中国の書にふれるという軽い気持ちで参加した今回の書象会の旅は、私が思いも及ばない内容の濃い、信山先生の功績を称える旅でした。張廉卿陵園では、松本市美術館の信山記念展示室で見た映像が現実となり、何か違う世界にいるように時間が過ぎていきました。

田中節山先生をはじめ書象会の先生方が信山先生の遺志を引き継ぎ、中国にその功績が残されている素晴らしい光景を目の当たりにすることができました。湖北省博物館で驚いたことには、特別室に案内され、張裕釗の真筆を目の前にして鳥肌が立つ思いでした。また、黄鶴楼に行った時、ここで書象展が開催されると聞き、びっくりしました。

最終日には、張裕釗氏の子孫の方との夕食会が行われました。それはそれは心に残るステキな時間でした。日中友好の架け橋となり、書象会のさらなる発展を期待しています。そして、この書象会に所属できたことを誇りに思いました。(神山禮光記)